★親子で楽しみましょう　表紙のおはなし(6頁～)･･･**「はしをわたれなかったくまくん」**

★私もと共感！！　わたしのストレス解消法(18 頁)

･･･「きょうは好きなもの、食べたいものしか食べない！」という日をつくる

５月号の特集は　これでいいの？離乳食

初めての子育てでは、離乳食はわからないことだらけ。しかし、離乳食は十人十色で、食事は「楽しい」が一番。子どもの発達を喜び、親子のつながりを深める離乳食にと思える保護者の経験談。子ども一人ひとりに合わせて離乳食を作ってくださっている給食職員の経験談。給食室職員の保育士と連携して取り組みなどがわかる実践。離乳食を通じて、保護者同士、保護者と保育者のつながり・交流が広がっていっていることがわかります。小論では子どもの発達にあわせた離乳食についてわかりやすく書かれています。

◆実践　「食育懇談会を通して―保護者から学びいっしょに考えあって」(24 頁～)

保護者同士の交流で、「そんなにがんばらなくても大丈夫！」と先輩保護者。「レパートリーが少なくても大丈夫。市販に頼ったっていいじゃない？それに『保育園で一食食べてるからいいか』と任せてもらっていいんですよ。お母さんが健康に笑顔で過ごせることが、子どもにも良いことだと思います」と。調理室のプリントも参考になります。

◆実践　「まちのきゅうしょくしつ」(29 頁～)

「つくり・たべる・まなぶ・子どもの食を守る！』を合言葉に、2010 年 12 月に京都市の保育園給食室の職員と元職員を中心に結成された「給食人サークル」。保育園に入園せず、家庭・地域で子育てしている親と子を対象に、離乳食の講習会を毎月行ってきて、今までに 2650 組の親子が参加しています。

◆小論　「戻ってもいい」離乳食の進め方(34 頁～)

子どもの発達には個人差があります。給食室は家庭と相談しながら離乳食を進めていきますので、心配なことがあったら、なんでも聞いてみてくださいと、管理栄養士さん。

★わたしの保育実践ノート(66 頁～)　今月は**「楽しく豊かな「食」体験を！―調理室とつながる『食』の楽しみ」**です。ゼロ歳児から「食べることが楽しい」と思えるような雰囲気づくりを大切にしながら、年齢ごとの実践が紹介されています。

★沖縄、子ども食堂から(50 頁～)…よしはる君はお母さんに子ども食堂に行っていることをどう話したのでしょうか？*「子どもたちは難しさを乗り越えるチカラを持っている」と。*

★もっと気楽に家事・子育て(56 頁～)…私の「理想の生活」を考えてください。

★おばちゃん、保育園であそぶ(60 頁～)…朝 7 時に登園する三歳児のお部屋。

★2 歳児の発達と保育②(76 頁～) 身体の育ちに学ぶ①…

「じぶんで」することの誇りや自信を積みかさねていく、二歳児の時期。個人差はあ

りますが、「走る」「よじのぼる」「くぐる」「両足で跳ぶ」などの動きを、おとなが「いつの間に？」と思ううちに身につけていく二歳児の身体の育ちとその特徴について、生活やあそびのなかの子どもたちの姿を交えながら論じられています。

★保育、こんなとき どうする？どう考える？ ㉖もう五歳なのに…○○なのに…を考える(84 頁～)…清水玲子（元帝京大学）さんは、

➡○○なのにと言われたら、「子どもの気持ちはどうだったかしら？と胸が痛みます」。

➡国の保育士の配置基準は、二歳児 6：1、三歳児 20：1。「それまで着替えなどその子のペースに合わせて子どもの意思をできるだけ尊重してていねいにかかわってきた先生でも、三歳児クラスになったら、子どもが先生の手を借りないで一人でもきちんとできるようにさせようと、二歳児クラスの終わりにはあせってしまうといいます」。「三歳児クラスに上がったとき、今年の三歳は自分でしっかりできていない、二歳のとき、どういう保育をしていたの？と園のなかでほかの先生たちに言われてしまうのがつらい、三歳の担任が大変なのを見ると申し訳ないと思う」と。

➡「五歳標準」のように「○○標準」のようなものさしがあって、それに対して目の前の子どもたちがそれよりできる、できないとおとなが評価を下している。子どもからしたら、今の自分がありのままが認められていないような気持になるのではないでしょうか。そして、担任としての力量を評価される…おとなたちが、評価に追い詰められて、いつの間にか、今目の前にいる、子どもたちの育ちをていねいに見ることができていない気がするのです。

➡みんなで子どもの思いをひもといていくことが、私たちを救う道かもしれません。

※新保育所指針では、保育をＰＤＣＡサイクルで評価することが導入されました。そして、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」が示されています。子どもたち一人ひとりに寄り添うのではなく、子どもの気持ちを大事にしない、子どもの気持ちに寛容でない保育に追い込まれていないか、保育者集団として話しあいましょう。

★雨宮処凛の少～し力をぬいて㊳相模原事件・植松被告と面会して

(62 頁～)…彼には「否定されないと肯定されたと捉える」という思考の癖がある。「認知の歪み」とでも言うべきものがどのように形成されていったのか、裁判で、詳しい生育歴には今のところそれほど迫れているとは思えない。

※効率主義、成果主義、ゼロ・トレランスが蔓延している今日、保護者同士、保育者同士、そして保護者と保育者の信頼関係を作っていき、子どもたち一人ひとりのきもちを大切にした保育、楽しい食事について考えあう大事な問題提起がされている５月号です。『ちいさいなかま』2020 年３月号（特集：子どもに「つけたい」力とは？）も、あらためて読み直したらと思います。３ 月号をお持ちでない方は、バックナンバーを是非お求めください。≪福岡県保育センターTEL092-761-5234 fax092-781-1995≫

◎58 頁で成富清美さん（福岡県保育センター会員）の著書が紹介されています。ご購入希望の方は、福岡県保育センターにご連絡をお願いします。